



第10代会長 富田 きよ子
(平成21年から現在まで)

平成21年度宮城県看護連盟総会で第10代目の会長に就任しました。看護連盟には看護職に就いたその4月から約40年以上、看護協会と同時進行で会員になりました。この二つの職能団体は、私の看護師としての職業生活を支えてくれた車の両輪のように頼りがいのあるすばらしい団体です。そのため、定年退職後も会員として席をおくことが看護の後輩を支えることになると思い会員を継続しておりましたところ、平成21年7月から会長にと指名を受けました。

浅学非才な私ですがささやかな恩返しを含め看護職全体が更に良い看護をしたいという夢や希望がかなえられ、看護の道を深く探究できる環境を創っていきたく思います。そのためには、第22回参議院議員候補予定者のたかがい恵美子さんを当選させることです。特に宮城県加美町出身で古川女子高を卒業された方です。どんなことがあっても必ず当選させること、宮城県看護連盟は本部からの活動方針を軸にして選挙戦略を作りました。

戦略1 ホップ・ステップ・ジャンプを目的に添ってしっかり行う。

戦略2 自民党議員立候補者の選挙応援を行う（仙台市長選挙・衆議院議員選挙・宮城県知事選挙を県連局長の指示を頂きながらしっかり応援する）

戦略3 たかがい恵美子さんのリーフレットを多くの方に配布し読んでもらう。

戦略4 未来を創る会会員名簿を一万人以上集める。

戦略5 未来を創る会会員にはがきを出し選挙行動に結びつける。

戦略6 ポリナビワークショップを開催し若者に選挙力を発揮してもらう。

戦略7 全活動期間中に段階毎に電話をかける。

戦略1～7まで戦略目標をすべて取り組み一つ一つの戦略が成功するよう寝ても覚ても「たかがい選挙」と努力を重ねた結果、宮城県は5671票、全国では210443万票を獲得し上位当選なさいました。本人も、お母様もそして会員全員の頑張りもすばらしいものでした。今回の選挙で多くのことを学びましたが大切なことは①おれなないこと、②支援者との関係作りをしっかりと行うこと、③当選させるといふ強い信念で行動することが大きなポイントになることを実感しました。

参議院議員たかがい恵美子先生にバトンタッチなされた元参議院議員南野知恵子先生が22年秋の叙勲で旭日大綬章を受賞されました。まさに朝日の昇る勢いで3期18年を駆け抜けすばらしい業績を残された先生に感謝申し上げます。先生のお優しい物腰、何人もの赤児をとりあげたであろう柔らかなあの手の感触は忘れることはできません。

また、日本看護連盟の名誉会員になられました、齋田トキ子先生が日本でただお一人ナイトンゲール記章を受賞なされ、常に看護と共に人生を歩んだ先生は看護連盟新春セミナーで「看護は人類が生存する限り永久不滅の職業」と結ばれ会員を魅了しました。

平成23年度の日本列島は豪雪や霧島連山新燃岳の大噴火、鳥インフルエンザ等の被害に驚いていたところに3月11日の東日本大震災が起きました。

車の運転中に地震が起きましたが、まさかこんな大惨事になるとは考えてもおりませんでした、学生達を迎えにいき送り渋滞で真っ暗な闇の中を20時頃に家に帰り、翌日、閑上で実習している学生を探しに7時30分に家をでて途中からがれきと泥の中を歩きましたが、また、津波が来るとのこと、警察車両も消防も自衛隊も退去させられました。市役所で学生の情報を集めながら、今自分は何をすべきかと考えた時に、まずは、たかがい先生にこの現状をお知らせし力になってもらおうと思い、電

話を待つ長蛇の列に並びました、先生はいつものように、てきぱきと、何に困っているのか、必要なものは何かと仰せられ、3月18日には名取市役所にたくさんの物資が届きました。ありがたかったです。安否確認出来ない沿岸部の2病院を訪問し、看護部長さんやスタッフの方々とお会いし、皆さんの非常に疲れて憔悴きった顔を拝見しました。宮城県看護連盟は、自分の家族や自宅がどのようになっているのか分からないまま仮眠室に泊まり込み、患者さんの看護を継続させている看護師の後方支援を行おうと決めました。3月31日に清水嘉与子日本看護連盟会長がお見舞いを持ってきて下さりそれを有効に使わせていただきました。また北海道はじめ各地の看護連盟から救援物資が届き13支部にお届けいたしました。

阿部俊子先生のご尽力で、助産師を志し入学を前に津波の犠牲になった娘さんの看護師合格証書を、厚生労働省から直接お母様に届けて頂き感激いたしました。

平成24年度の総会では沿岸部の病院で救助に大活躍した菊池里子看護部長さんと、沿岸部からバスで運ばれてくる負傷者を受け入れ看護をした、高橋秀子看護部長さんにご講演を頂き、お二人の力強いパワーに涙しながら聞き入りました。

各看護部長さん等に、その時の看護の体験を形に残し後輩に伝えると共に災害看護に備えるため、東日本大震災特集号としてまとめられた機関紙は多くの方々に読まれ、反響が大きく事務局にさまざまな感想が寄せられました。

大学の保健看護学科の学生も特集号を読み、各病院の看護部長さんの所にフィールドワーク・ヒアリング調査に出かけ、それをまとめ発表しました。大震災という生まれて初めての体験をし、自分の命を守るだけでなく、患者さんの命を守る側になる現実が見え真剣に学ぶ姿は素晴らしいものでした。

23年度の計画には載せませんでしたでしたが、宮城県看護連盟50周年記念式典を行いました。宮城県看護連盟はひとつの大きな節目を迎え、未来に向かって何をなすべきか問われる時代に入りました。看護師は人から頼られる職業です、看護師が生き生きと働けるライフワークバランスをしっかりと整え、患者の命を守る原動力になるように支援できる宮城県看護連盟でありたいと願っています。

今後とも宮城県看護連盟発展のためにご協力いただきますようよろしくお願いいたします。



元役員 関口 英子
(平成21年～平成22年)

2008年から2年間、仙台赤十字病院支部長として活動をいたしました。リフォーム連盟のもと仙台赤十字病院支部として設立され、支部活動を行ってききましたが、院内で活動することで連絡員会議の参加率も良く、会員から「連盟は何をしているかわからない」等の声が聞かれない様に、基礎研修等で、丁寧に連盟活動を伝達し、理解して頂くように努めました。又、会員一人一人が自覚を持って活動できるような組織作りを目標に活動を行い、少しずつ浸透してきたように思います。

2010年、参議院議員選挙に看護職代表である高階恵美子議員を国政の場へ送ることを目標に多くの活動を行ってききましたが、宮城県出身であることから、富田会長を初め役員の方々は崖っぷちに立たされたような思いで、エネルギーあふれる思考と行動で必死の思いで選挙活動に取り組みました。そのような方々と一緒に活動ができ、学ぶ事ができたことは本当に幸せであると感謝しています。

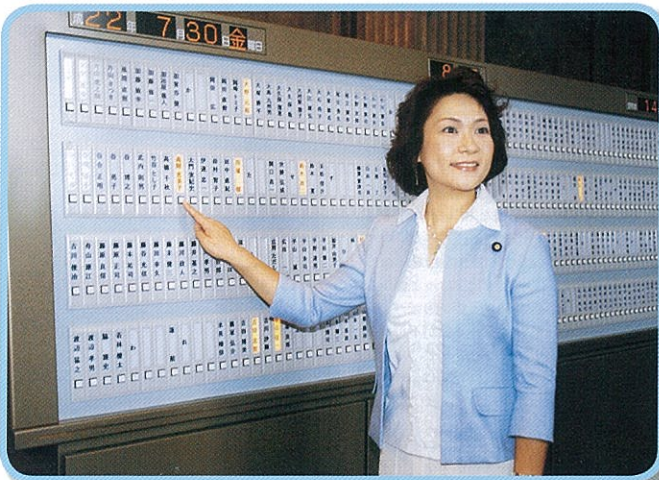
100万人の看護職がいるにも関わらず約20万人の連盟会員、無関心の方や連盟の存在すらわからないという看護職者にどのように伝えていくかが課題であります。看護職が働きやすい環境と質の高い看護が提供できることを目指して、地道に活動していくことが大切であると思っています。

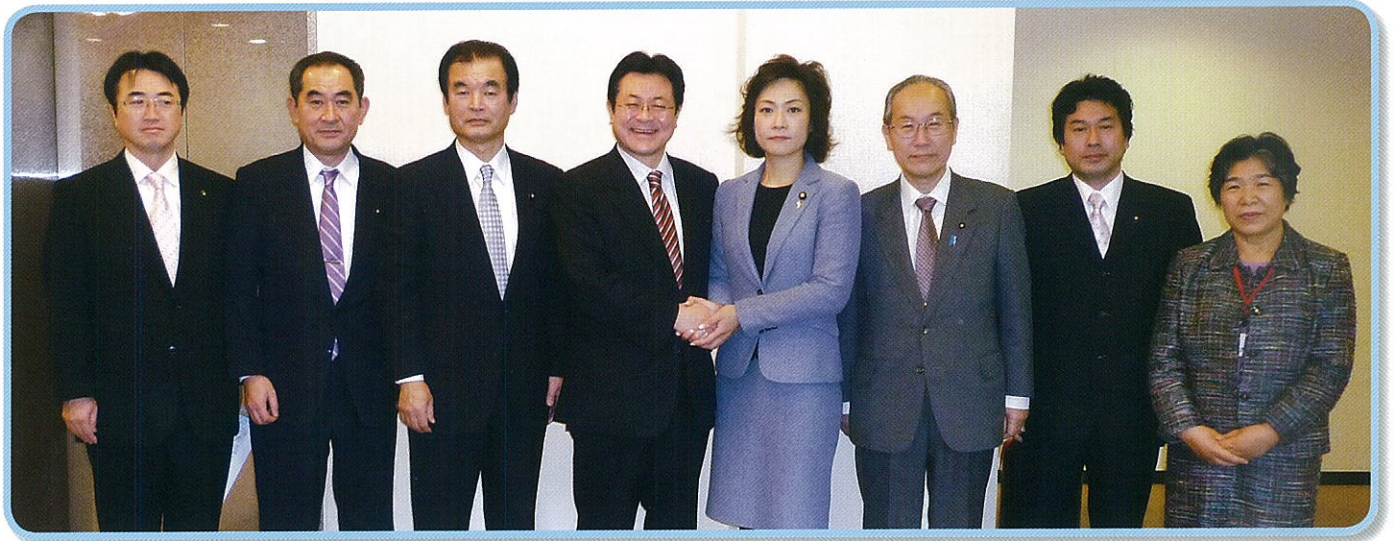
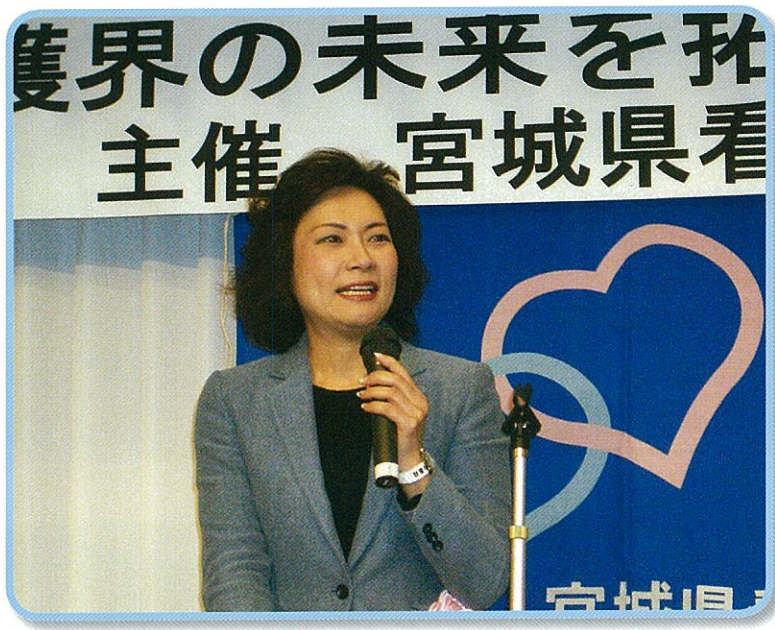
(仙台赤十字病院)

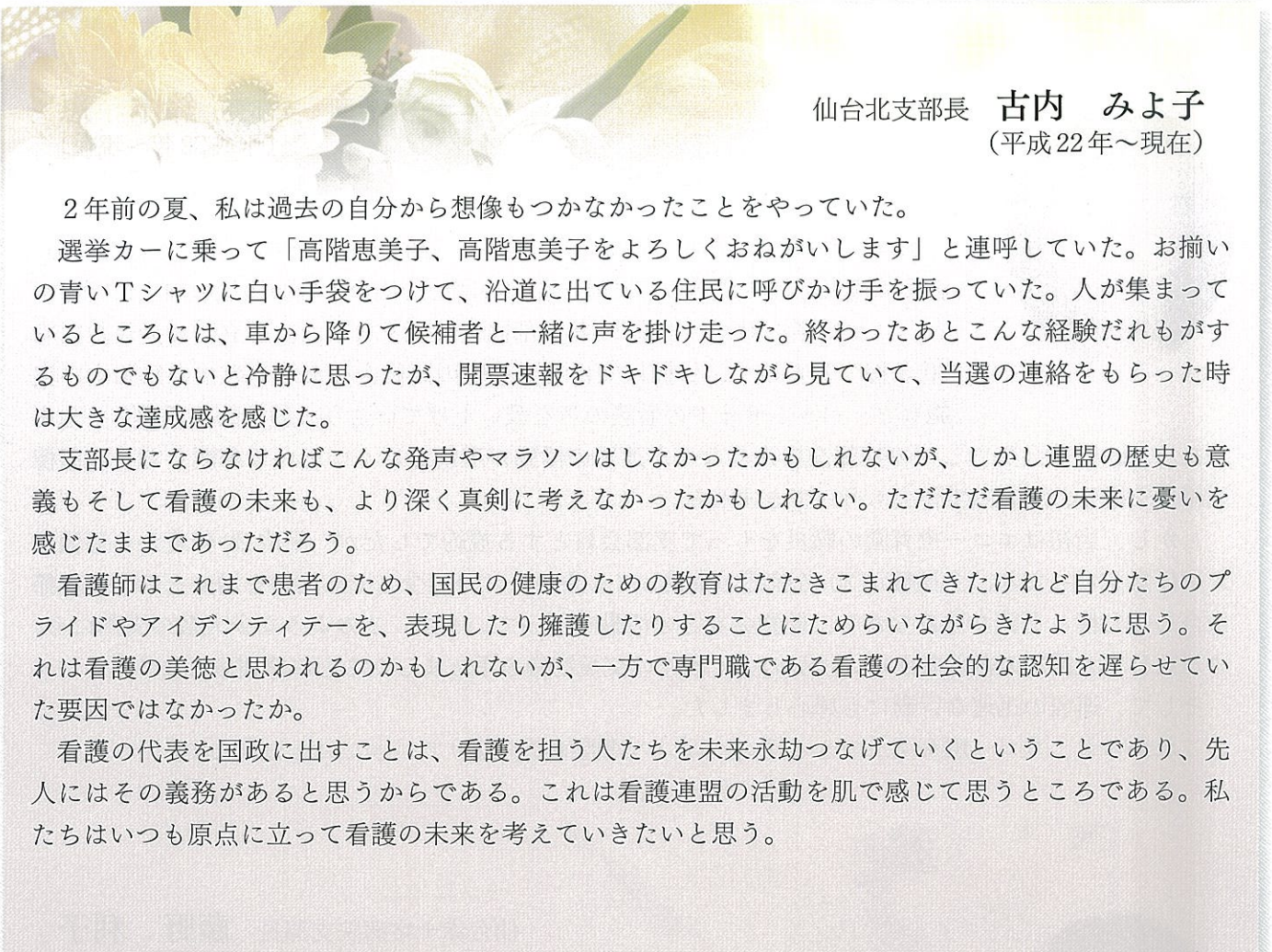












仙台北支部長 **古内 みよ子**
(平成22年～現在)


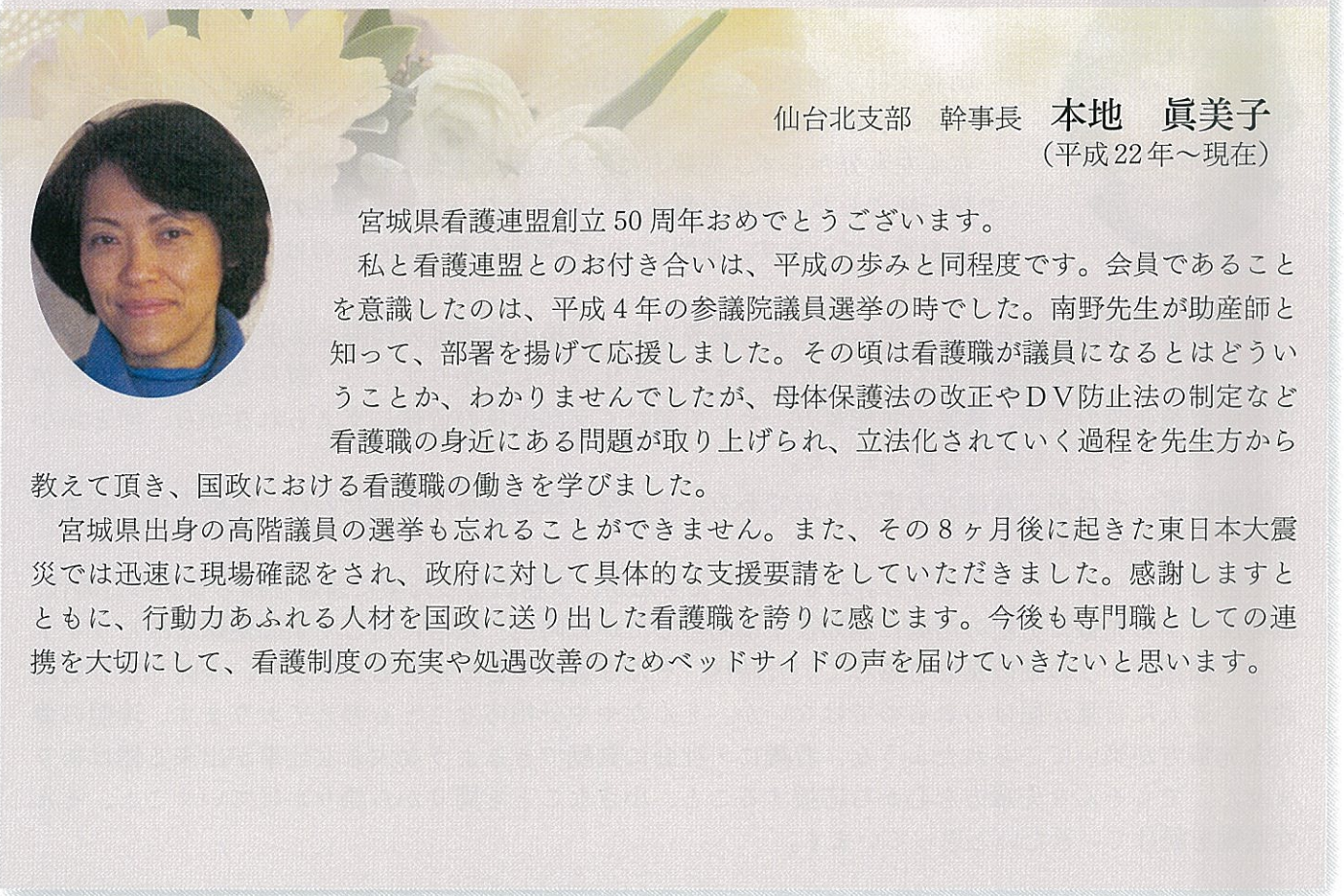
2年前の夏、私は過去の自分から想像もつかなかったことをやっていた。

選挙カーに乗って「高階恵美子、高階恵美子をよろしくおねがいします」と連呼していた。お揃いの青いTシャツに白い手袋をつけて、沿道に出ている住民に呼びかけ手を振っていた。人が集まっているところには、車から降りて候補者と一緒に声を掛け走った。終わったあとこんな経験だれもがするものでもないと冷静に思ったが、開票速報をドキドキしながら見ていて、当選の連絡をもらった時は大きな達成感を感じた。

支部長にならなければこんな発声やマラソンはしなかったかもしれないが、しかし連盟の歴史も意義もそして看護の未来も、より深く真剣に考えなかったかもしれない。ただただ看護の未来に憂いを感じたままであったらう。

看護師はこれまで患者のため、国民の健康のための教育はたたきこまれてきたけれど自分たちのプライドやアイデンティティーを、表現したり擁護したりすることにためらいながらきたように思う。それは看護の美德と思われるのかもしれないが、一方で専門職である看護の社会的な認知を遅らせていた要因ではなかったか。

看護の代表を国政に出すことは、看護を担う人たちを未来永劫つなげていくということであり、先人にはその義務があると思うからである。これは看護連盟の活動を肌で感じて思うところである。私たちはいつも原点に立って看護の未来を考えていきたいと思う。



仙台北支部 幹事長 **本地 眞美子**
(平成22年～現在)

宮城県看護連盟創立50周年おめでとうございます。

私と看護連盟との付き合いは、平成の歩みと同程度です。会員であることを意識したのは、平成4年の参議院議員選挙の時でした。南野先生が助産師と知って、部署を揚げて応援しました。その頃は看護職が議員になるとはどうか、わかりませんでした。母体保護法の改正やDV防止法の制定など看護職の身近にある問題が取り上げられ、立法化されていく過程を先生方から

教えて頂き、国政における看護職の働きを学びました。

宮城県出身の高階議員の選挙も忘れることができません。また、その8ヶ月後に起きた東日本大震災では迅速に現場確認をされ、政府に対して具体的な支援要請をしていただきました。感謝しますとともに、行動力あふれる人材を国政に送り出した看護職を誇りに感じます。今後も専門職としての連携を大切にして、看護制度の充実や処遇改善のためベッドサイドの声を届けていきたいと思ひます。



エコ療育園 支部長 **鈴木 恵**
(平成22年～現在)

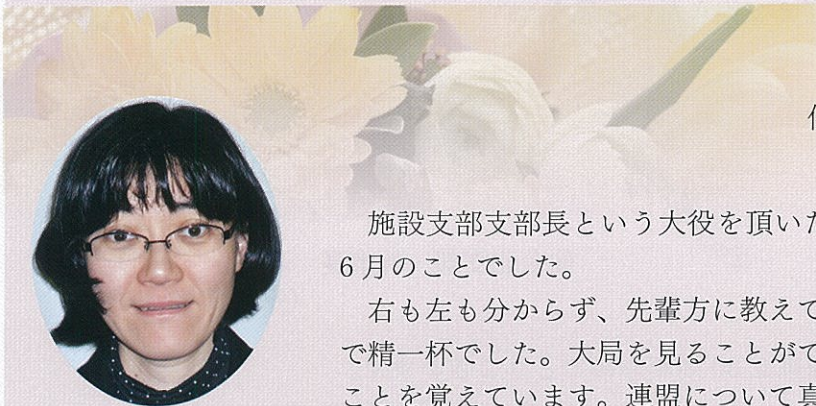
宮城県看護連盟創立50周年、おめでとうございます。

エコ療育園支部は、宮城県看護協会・連盟と一体となり政策提言を行い、看護の代表を政界に送る、医療と政治の関心を高め、社会福祉の向上に寄与するという目標を掲げ、平成18年支部設立に至りました。創立時の会員数は約60名程でしたので、目標に向け看護連盟の研修会の参加や政治の勉強会の実施など、ベツトサイドの看護の声を吸い上げていこうと積極的に活動してきました。又、支部会員としての情報交換が少なく、連盟の活動が理解しにくいという課題もあり、病棟連絡員を通し、施設内学習会も行ってきました。

しかし、当初はエコ療育園の職員をもって支部会員とする規約でしたが、平成22年度から連盟加入は任意となった為、会員数が20名程度と激減してしまいました。少しでも会員を増やそうと、季節に合わせた催しを織り込みながら、勉強会などの活動を行っています。このような少人数の支部にも、まだ東日本大震災の落ち着いた状況の中、多くの支援物資を頂きましたことに感謝致します。

そして、連盟の迅速な行動にも感心しました。

これからも、エコ療育園ができる精いっぱい連盟活動を続けていきたいと思えます。



仙台赤十字病院支部長 **藤野 利子**
(平成22年～現在)

施設支部支部長という大役を頂いたのは、あの熱い参院選直前の平成22年6月のことでした。

右も左も分からず、先輩方に教えて頂くまま、目の前のことに向き合うだけで精一杯でした。大局を見ることができないまま、選挙の結果にただ安堵したことを覚えています。連盟について真剣に考え始めたのは、その後のことでした。

連盟活動で見聞きすること・学んだことの重要さと、現場の看護師の理解に温度差を感じ、少しでも差を縮めることが役割なのではと気がつくまでに1年以上もかかりました。頼りない支部長ですが宮城県看護連盟の皆様、職場の諸先輩方、そして同じく支部役員の皆様に支えられながら、何とか小さくともできることを探して参りました。

看護政策、それがこれほど大事なものであることを学ぶ機会が与えられたのは、私の人生に大きな意味を持っております。

生憎強いリーダーシップは持ち合わせておりませんが、公務員だった頃に連盟を知らなかった時代、職場風土から先輩に労組の活動に無知なまま同行していた時代、政治に対して無知蒙昧な故にワイドショー知識ばかりの胡散臭さを感じていた時代、そんな過去の自分があるからこそ、今同じような境遇にいる人に言葉が届けられるのではないかと考えております。連盟の偉大な先輩方が築いてこられたような、看護に・社会に貢献できるような大きな仕事ができる器はありません。でもそんな先輩方を心から応援すること、小さなことを周りから語りかけていくこと、そんな活動を続けていきたいと思っています。



第二副会長 西村 純子
(平成23年～現在)

看護連盟創立五十周年を祝し、感慨深い思いがこみ上げて参ります。私は昨年六月退職と同時に、富田きよ子会長より連盟役員の推薦を頂きました。重責ですが、先輩諸姉のご指導を得ながら再び務めさせて頂いております。

役員之苦渋は、今も昔も会員の増員ですが、五十周年式典に際し、富田会長と神林幹事長が連盟未加入の病院を何か所か訪問し、ご案内されたそうですが、その甲斐あり何人かの方がおいでになったようです。

しかし私の場合は苦い体験となって思い出されます。

昭和53年頃、仙台厚生病院の曾根喜代子さんと連盟勧誘に出かけました。二か所の病院の看護部長に接見し、その後タクシー運転手お勧めの日帰り温泉を楽しみました。日暮れの外は豪雪で今でも恐怖感が蘇って参ります。それでも、努力の甲斐なく、私たちは力不足に落ち込んだものです。

素敵な思い出は、吉田ますよ支部長時代の昭和63年頃のことです。赤坂プリンスホテルで石本しげ先生の祝賀会に海部俊樹総理大臣がお出でになり、お祝いを述べられたように思います。その席だったか、森喜朗議員が人を掻き分けて、やっと私の分までイクラ丼を取って下さいました。丼の美味しさは未だに舌に残っております。

石本先生のご講演は何度も拝聴する機会がありました。無所属だった為、頼れる議員が居らず、議員の先生方の看護に対する関心が低く、先生は幾度となく「近くに來たついでです」と手土産持参で、看護の理解を図られたそうです。静かな口調と、温かい手と眼差しからは、想像も出来ない強い信念で、頭が下がる思いでした。平成6年に私が第三の職場に転勤した病院で、年配の婦長へ石本先生の講演会出席を勧めました。その後、思いも寄らず婦長会で涙ながらに、先生のご活躍を報告し、そのことが突破口となり、毎年一人ずつ連盟に加入してくれるようになりました。又、協会担当の主任が、連盟の説明会を開いてくれたことに感動し、今でも感謝しています。このように、私にとって連盟活動は視野を広める人生の勉強になりました。

連盟の仲間は、チームでなんとか困難を切り開いて行こうという絆で結ばれているので、この年になってもワクワクの気持ちが味わえるのです。看護師にそのような体験をさせたい一心で、入会しやすくする為に随分勝手なこともしたとすることがあります。当時、連盟会費4000円は新人にとって厳しいと思い、病棟会費で2000円負担して貰いました。病棟人員構成は、新人10人に対し新人以外の看護師は5、6人、文句も言われなかった昭和55年頃が懐かしく思われます。

忘れかけていたのですが、ところどころ脳裏をかすめるシーンがあります。

その日は雨の寒い日でした。連盟役員会で署名用紙を施設毎に配布されました。看護協会の一室に山のように積まれた用紙、吉田支部長は、皆に頭を下げ、お願いされました。しかし、それでも署名用紙は捌けませんでした。会員が帰った後、支部長は風呂敷包みに残りの分も更に持ち、八幡町の小道を重そうに歩いて帰られたお姿が目に残っています。ご主人がご病氣中でのこと、この御苦労を誰が知っているだろうかと思いました。

連盟研修会での強烈な印象は、福島県飯坂温泉での合宿です。福島の20代と思われる方の発言が耳にこびりついています。「私は組合員ですが、看護職の地位向上には連盟活動で国政に声を届けるのが当然です。」と。あの人は今、どのような活動をされていらっしゃるかしらと、ふと思うことがあります。

何れにせよ、初代久光なみ子連盟支部長から50年経ち、当時の部下の私に与えられた任務を巡り合わせと思い、精いっぱい努めたいと思う気持ちでございます。

